

記録

入津湾の大漁船声

「ヨイヤラジヨー」考

烟野浦史談会
会長 富澤 泰

ホイホツホイ (船指子に合せくり返す) 網子合唱

ヒンエー エー (入声 調子を入れる船頭一人)

ヨイヤラ ヨイヤラ ヨイヤラジヨー ヤラジヨー

ヨイヤラ ヨイヤラ ヨイヤラジヨー ヤラジヨー

ヨイヤラ ジョー ヤラジヨー (ずれも合唱)

ハーリヤーリヤー

ハーレバリヤツソイ

この分を長くくり返す。古網(オオミ)左網(サカミ)は
おかれ、初めから交互に歌う。
しだいに漁船が岸に近づく。

ヒンエー エーオー エーオー

ヨイヤラジヨー ヨイヤラジヨー エー オツ

ヤレノセ ヤレノセ ヒンエー

船は浜につき、投錨する。

昨年十月十六日、入津湾烟野浦の海、江武戸岬から、
時ならぬ二艘の中着網船が、もやい船(二艘の船が横木ま
たは綱で連結一体になる)に大漁獲(たりのり)を交互に組ん
で、拾丁船に三十人近い網子がわかれて漕争となり、船
尾も速く、立てた大漁獲が風にはためき、大漁にいきま
る船声のコーラスはさらに調子をあげて、廣い湾内に力強
くひびきわたる。

これを追うカメラ班の船と共に、漁船が岸に近づく。
乗組む漁師は、どこで見つけたか、数十年前の漁師の服
装、刺子の尻切れの筒袖着。網子は八十歳近い往年の海
の男達数人を中心、青壮年約三十人。岸辺には数十年前
振りの行事の再現を見ようとする、多数の村人たちの姿
でいっぱいである。

その夜のテレビニュースでは、早速「入津湾の大漁船
声」として放映され、翌日の各新聞は「海の音頭ヨイヤ
ラジヨー、五十年ぶりに復活」などと題して報道された。
この船声の保存は、すでに往年の中着網漁業の衰退と
ともに、入津の海から消え去り、民俗資料的保存も、た
だ老人達の語り草に過ぎなくなっていた今日である。こ
の船声は、かつて漁船が船によって操業されていた頃ま
での存在で、大正の七、八年ごろから、漁船が架動機をつ
けるようになると共に、この船声の必要がなくなつた。

昔、入津湾外で中着網で網(いおし)を盛んに漁獲された
頃、湾の入口江武戸岬に鎮座する江武戸神社、海の守護
神に初穂として網を海に投げ入れ、大漁旗を高々とあげ
前記の船声が大漁の凱歌であり、まことに勇壮な景観で
あった。

烟野浦の部落は入津湾内一料の奥であり、各網元数統
の網船は、若干の時間はずれをもつて、真間を中心して
夜の漁(りよう)を終えての浜への帰りである。船声の交錯
は、この状勢の中で生まれた人々にとって、忘れ得ぬ風
物詩であった。

中着網漁の本末の姿は、二艘の大船で網を置きまわし、
網の魚群を捕え、二艘の船は一か所に集結して、網子の
手綱によって引き揚げる操業である。それがあたかも巾
着の紐をしぼりあげる姿に似ているところからの名称で、

標業が機械化されるに従って、揚繰網、近くは巻網漁業と名称も変っている。蒲江所内は無論、日豊海岸では、上は臼杵・津久見・鶴見・米水津湾、下は宮崎県北浦から美々津までの漁法は現存している。漁獲物も鱈(まぐり)鰯(おじ)鰯(いおし)と、各町村の貴重な海産物として、主として加工され、販売されている。蒲江でも「みりん干」は名産品となっている。

その昔の、中着の大漁、水揚げの感動は、生産の場での凱歌である。そしてその時の鰯声は、料余の入江の奥の浜で待ち分まえている寂人達への信号でもあった。入江(船頭)の意で自他の網の区別がわかり、漁獲された櫛の熱も、鰯声の組み合おせに独得のふちようがあった。当時の漁獲量の単位は、一桶二斗五升の櫛で量られていた。

陸揚げされた鰯は大釜でゆであられ、日乾して乾燥して乾鰯(ほしか)、唐人干とし、大羽(大型)は塩蔵されてかきばと呼ばれていたが、加工不可能な梅雨期は樽詰にして肥料とする外なかった。暮れごろ瀬戸内海地方では乾鰯は佐伯乾鰯として貴重な肥料で、良質のものは煮出しとまっていた。瀬戸内は勿論であったが、四国地方の宇和島・八幡浜なども、佐伯乾鰯や唐人干の、主な交易の籠目であった。

鰯声復活のいきさつについて

大正の初期、すでに入津湾では消えてしまっていたこの「鰯声」が、どうして今回復活したのであらうか。

まず昭和三十六年、どうしたきっかけからか、NHKがこの「ヨイヤラジヨ」の存在していたことを知り、その声だけの採録を求めて来た。当時蒲江所役場の上入津支所長であった松木藤作氏の肝入りで、往年この漁

船に乗っていた人達二十人近くを集め、佐伯三の丸で実演してそれを録音したことがあった。しかしその目的は何であったか、この人達もよく知らなかった。

一昨年(昭和三十一年)のことであった。北九州大学の民俗研究会が、「入津湾の民俗調査」に来所中、「往時海の生活」の中から、松木氏(伊勢本神社宮司)の手許に、当時の録音テープが保存されていることがわかり、前記江武戸神社の夏祭り、初めて部落の放送塔から放送され、町の人々の感興をそそり、民俗資料として関心をもたれるものとなった。

ところが、昨年九月、東京の東映教育映画部から「ヨイヤラジヨ」の存在について、所教育委員会に照会があり、十月十六日、声だけをなく、海上での実演を、同時に近い姿に録画、録音することになった。

当時の漁師としては、船頭的存在の壺月芳さんは八十歳に近く、それに次ぐ小野子さんは眼が不自由であるのをおして加わり、このお二人を中心に、当時の海の人達幾人かと、その後を継ぐ若い人達を特訓したものである。これには所教委の前田課長、富高主事が指揮をとり、上津漁校役員諸氏、部落区長会、蒲江所当局の方々から、物心両面について積極的な協力があって実を結んだ。

なぜ今はもう存在しない、昔の漁業形態の中での「鰯声」を復元しようとしたのか。東映教育映画部の企画が、私達の村里について、その漁村の姿、漁獲生活そのもののつながらる民俗資料の無形文化財としての取り上げ、さらにその奥にある「海の遠鳴り」にも似た音楽であると、いうことを、みんなが感じとったからであらう。しかも「大漁鰯声」が合唱されたふるさとへの海は、昔も今も変わらないことなく、私たちがその中で生活し、うけついで、永遠に生きているといえるよう。真珠養殖でよじれた海でも、

永久の死ではない。天の摂理はこの海を守ることを教えてくれ、人々もまた目覚めて行く。懐古的民俗資料の温存よりさらに一歩出て、この声が再現され、村人の耳を打つことによって、新しい海が生まれてくるという願いを私たちがもっている。さらに東映教育映画部の脚本監督の萩野正昭さんはこう説明してくれました。

「昭和三十六年に録音されたNHK保管のテープは、東京芸術大学の音楽関係の小泉教授、小島講師によると、民謡とその祭生の原点としての、生産のよるこび、あるいは悲しみの農漁民の生活の声として、『大漁嚮声』は珍らしい存在で、立派なメロデーとなっている。」と聞かされた。日本映画教育協会の企画、製作担当を東映が受持ったもので、この「声と姿」はこうした意味で、「日本音楽と民謡」と名うたフィルムで、遠く山形、沖繩と、あるいは高千穂の刈干切唄も収録され、海の民謡として、この嚮声は、「大漁うたい込み唄」(斎太郎節)の、

ウンリヤントット ウンリヤントット
松島のサヨ 瑞巖寺ほどのーりーりー
などと展開して行くという。

このフィルムもやがて出来あがって、又々な鑑賞するの程近いようである。僅かな上映の時間かも知れないが、自分の郷土の中におった姿が、声が、広く社会に紹介されることは嬉しい。それは、佐伯史談会の提唱によって着々実現している「三の丸櫓門の復元」にも通ずる共感でもある。

この声の保存を考えなくてはならない。
ヨーヤラジヨー余韻
この「ヨーヤラジヨー」は、いつごろから生まれたか

のか。

これは入津湾の漁法の沿革、ひいては「十九浦の富で持たれた毛利藩」といわれていた漁業沿革史でもあるが、私はまだこの点、初歩にもなっていない。今後の問題として持っておくとして、ただ一つ時代考証の一助ともなる挿話が、畑野浦部落に伝わっている。

幕末安政の初め、瀬戸内海は藩の浦(広島県)に、矢筈の船着きめぐらした、豊後佐伯、毛利藩主の御座船が、ときの声きあげ、威勢よく着ぎこまれて来た。船番所役人は早速出迎えたところ、殿様然たる人も、供の船手奉行にも供揃いなどにも、どうも不審のかがある。そこでこの船を鞆の浦に押留し、早飛脚で毛利藩に照会したところ、それは真っ赤な偽せ者であった。そこでこの船と一同は捕えられ、佐伯に送還された。

この偽せの殿様は入津浦の大庄屋、富田家二代の寛兵衛良善、船奉行役はその甥小野伊太郎、家業は綱元で、入津地方でよく行なわれた瀬戸の海の、三社詣でで安芸の宮島を経て琴平に参り、そして最後に燧灘(ひうち灘)を渡って伊予の山石榎山参りの途次、鞆の浦に入港するに当って、殿様ごっこを打ったわけであった。

一月は不届者として処罰されたが、この大庄屋がなかの人物で、入津四浦の人達から慈父のよう慕われ、お上の賞えに極めて目出度かった。伊太郎も綱元としては富有で、運上銀などどどお取りなく、浦奉行への時折のつけとどけもよるしく、藩中にひいきの武家も多かつた。そこで罪は何等か減せられたが、罪は罪、お庄屋はお役御免となり、二人ともしびらく所替ときまつた。

場所、大庄屋は因辰の上津川、伊太郎は近くの尾浦、手限は二か年ということであった。ところがこの叔父、甥、甥の方が若かったので年寄の叔父の身を案じ、願

出て遠い上津川と尾浦と、服役の地を替えたという。い
ささかのんびりした次第だが、これも二人の善根による
ものであろうか。

佐藤鶴谷の「佐伯志」によると、安政四年には入津湾
の大庄屋は、すでに三原平兵衛となつてゐる。この事件
による大庄屋異動の後である。

富田寛兵衛は明治六年没、戒名は普濟院大源藏道居士
となつてゐる。今も伊勢本神社の境内に、三米余の石燈
ろうが一對あり、父は初代大庄屋富田達左衛門、権立郎
良孝（即ち寛兵衛）、天保二年に建てられてゐるが、これ
を見る度に、鞆の浦での出来事が回想されてくる。

甥の伊太郎は太男で力持ち、相撲好きとあつて、配流
の地因尾上津川にちなんで、しこ名（四股名）を上津川と
呼び、村の草相撲の土俵を湧かせていた話は、今もよく
語り伝えられてゐる。

この鞆の浦の御座船の入港の轡声が

ハイリヤーリヤー ハーレバリヤシヨイ（太鼓で獅子
こねを繰り返したという。すでに大漁轡声の文句は、こ
の時にはもう出来ていたものであつたまいか。

「板子一枚下は地獄」。今も昔も、海に生きる男達のき
つこは、ちつとも変つてない。その昔、東支那海上の八
幡船（ははんせん）の倭寇も、この殿様御座船の話も、ま
た一脈相通する壮快な話ではある。（おわり）

おえがき

書き終つたところ、前田課長よりの電話あり

それによると当日メカホンをもつていた秋原監督
の添書に「文部省の特送」になつたそうので、フイ
ルム一本町教委に寄贈される——とのこと。

書翰

年賀状に書添えて、編者宛

在大阪 顧問 矢 田 清

慶 賀 新 嬉 昭和五十年元旦

七日、歳末から新年へのお便り拝受、龍護寺の皆々様
にも、無事御迎春と慶賀申し上げます。

当方今年を以て七十一才、但し米重利により来る二月二十四
日を以て満七十才（中略）今をこゝろ至極佳境で、これからは一火
で菩提池副場の情景も、片端から片づけ稼かの元気で、衣
他事御休心有之度し。（中略）

さて三の丸櫓門も既に屋蓋瓦まで葺きあげたらしく、
保存会の方々及び史談会員諸子の御尽力を多と致します
が、これで当分は大丈夫でしょう。實際全国で櫓門が完
全に残つてゐるのは、まあ佐伯位かものでしょうか。金
沢、名古屋、彦根、和歌山、姫路、岡山の各城でも、櫓
門はなしです。今秋頃一度帰つて一見致しませう。

次に毎週三回青山越しの薩江まで、町史編纂のため出張とあり、
それは即苦勞旅ですが、後世まで残るものですから、折角御尽力を
お願い致します。その道中に見るい、ざりの美しさに感嘆とあ
りまして、私と昨秋箕面の奥山で、この赤い房の雲を見かけた事
があり、懐には赤すぎると、一体何の雲か知らんと、深審に思
つていたのですが、これでいざりの雲と解りました。

全くもう、ニスカ蠟をかけたかのように、艶々と輝い
ていまして、他の木の実は今頃になると、黒くくすんで
しまします。（下略）

（編者曰く）「奥山氏は小生の義兄に当たるので、楊舟に必要だと
るだけ書きました。この勝手、お許しを乞う。今秋も佐
伯に帰られたら、一踏に歩きませう。」